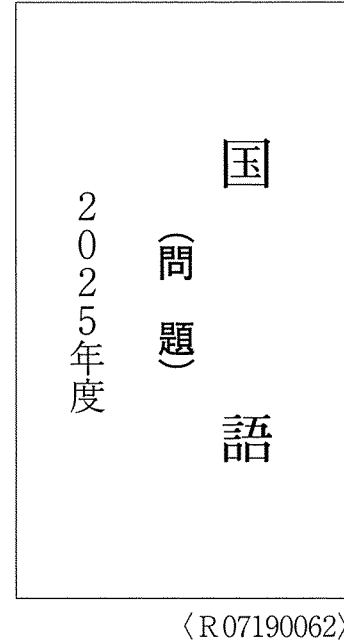




注意事項

1. 問題冊子および解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
 2. 問題は2～9ページに記載されている。問題冊子や解答用紙の印刷が不鮮明であったり、ページが抜けていたり、汚れていたりしている場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 4. 受験番号および氏名は、試験が始まってから、解答用紙の所定欄（2か所）に正確に正しいに記入すること。
- 読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

5. 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示がでたら、ただちに筆記具を置くこと。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

アイルランドで育ち、アメリカで新聞記者、文筆家として活動していたラフカディオ・ハーンが、初めて日本に来るのは一八九〇年、明治二十三年のことである。このとき、ハーンは鉄道でニューヨークからカナダのバンクーバーに出て、そこから横浜まで船の旅をしている。バンクーバーに至るまでの車窓の風景で、ハーンはカナディアン・ロッキーの壮麗な白い峰に魅了されている。それから十数日の単調な、荒涼とした洋上の旅を続けた末に眼にした富士山の神秘にして壮麗な姿を、ハーンは形容の限りを尽くして描いている。

まず、しみ一つない頂の部分が不思議な花の蕾の尖端のように淡紅色に染まり、それから一面金色の混じった白色となる——やがて頂から真直ぐ下へ延びる線が見えてくる——雨が急流となつて流れ下つた痕である。山全体が朝の光に包まれている——その下のくつきりと青い山脈がまだ一向に夜の眠りから醒めぬというのに。しかし日射しの明るさの中にあつてさえ、その美しさは依然として霊的な清らかさと——妖しいまでの繊細さを失わない——その輪郭あるが故にようやく眼は、この山を形作っているのは白い霜の蒸気——何か淡い雲のようなものではないと納得がゆくのである。われわれは、その息を呑むばかりの美しさに恍惚となつて見られている。一方、日が昇つてすっかり穏やかになった海面は、徐ろに柔らかな薄青色へと変り始める。

『ラフカディオ・ハーン著作集 第一巻』『日本への冬の旅』仙北谷晃一訳、恒文社

十九世紀終わりは、美術では印象派の時代である。ハーンも、刻々と角度を変える朝の太陽光線が富士の雪を様々な色合いに彩る、印象派風の微妙な色調の移り変わりを主に描き出しているが、富士山の美を、その積雪に白い山肌を射す陽光の当たり具合での色調の変化の壮麗さに見ているのは、六百年前の虎関師錬の漢詩と同様である。ともあれ最初に眼にする日本の風景が、朝の日射しに次々とその色合いを変えていく雪に覆われた富士山であつたのは、ハーンの幸運であつたに違いない。十九世紀後半のイギリス上流階級、知識人の山岳愛好をハーンも受け継いでいるようで、ハーンはカナダの風景でもロッキー山脈ばかりかバンクーバーから望まれる沿岸山脈の「美しい紫がかつた山々が、頂上に雪を散らしている」姿を嘆賞している。

そうしてこれから入港しようとする横浜も彼には夢のように美しい町に見えるが、その後方には、「そのかなたの青い火山脈の上に輝き続ける白峯」富士山が、その「不思議に夢幻的な美しさ」を見せているのである。

ここでは富士山は自然界の美の権化であるが、日本に住み、日本人の精神の深いところに分け入っていくハーンは富士山に寄せる明治日本人の心性を後に描き出すことになる。それが短編集『心』（一八九六）に収められた「ある保守主義者」である。

——中略——

長い年月を西洋諸国で過ごした主人公は、西洋諸国の強大さをつぶさに観察する。しかし彼は西洋の社会のどこに行っても、真実の信仰を見いだすことができなかった。「あるものはただ、虚偽

と、仮面と、快楽を追い求めてやまない

A

主義の世界、宗教の支配は受けにくいかわりに、警察の支配を受けているという世界ばかり」だったのだ。当時世界の最先進国であるはずのイギリスの首都ロンドンも、宗教的に見れば墮落した都市に過ぎないのだった。その墮落したイギリスから東洋に宣教師を送り込むという傲慢を平気でやってのける国なのである。ハーンの描くイギリスの墮落ぶりは次のようである。

この国の文明とは、正直者と狡猾な人間、力のないものと力のあるもの、この二つのものの、果てしない、醜陋きわまる争闘を意味しているのだ。暴力と奸智とが結託して、弱者をこの世の地獄に突き落しているのが、この国だ。こんな状態は、日本には、夢にもありはしない。

『心』平井呈一訳、岩波文庫

ハーンは、日本にはこんなことはない、という言葉をも、「仏教国の都市では」という言い方でも述べている。『心』を書いた当時のハーンにとって、日本の宗教は神道と仏教、そして武士階級の場合は、それに儒教思想が結合した、倫理性の極めて高い混合物であって、それが生み出す道德水準は、西洋諸国のそれよりもはるかに高いものであったのである。

ある保守主義者は、パリに滞在してその審美的な水準の高さに感嘆するが、裸体画が公然と陳列されていることには、彼のなじんできた倫理観から、どうしても受け入れることができなかった。保守主義者というハーン的主人公の命名は、こうした明治日本としてもいささか古い世代に属するサムライの青年の倫理観の古めかしさ、しかし、尊重すべきなつかしさをたたえた倫理観について言われているのである。

こうして西洋諸国に長いこと滞在してその道德、倫理の状況をつぶさに知った主人公は、西洋の偉大さは、その知的な面に、つまり科学文明にあるのであって、その宗教、倫理にあるのではない、と認識する。その西洋の知性とは、冷たく凍った高山のようなものである。

要するに、西洋の真の偉大さは、ただただ、知的な点にある。それはちやうど、純粹知性の冷たくそそり立った、峻しい山岳のようなもので、その山頂の永久に溶けない雪溪の下では、感情的理想などは凍え死んでしまうのである。そこへゆくと、日本の仁と義の文明は、幸福の理念においても、道德的な愉悦においても、大いなる信念においても、よろこび勇み立つ勇氣においても、朴直で私心のない点においても、また、まじめで足ることを知っている点においても、たしかに西洋文明よりも、比較にならぬほど卓越している。

そうしてこの日本の明治の青年は、倫理的には西洋は尊敬に値するものではないにもかかわらず、西洋の圧倒的な科学技術、科学文明を取り入れねばならない、という矛盾を考えた結果、次のような結論に達する。つまり、西洋の科学技術はこれを日本に導入するが、倫理道德の面においては、「国家の自衛に必要なもの、もしくは国民の自己発展に裨益しないようなもの」を西洋から輸入することには徹底的に反対するということである。

かれは、外国の文明を見たおかげで、それを見なければよくわからない、自分の国の文明の

価値と美点だが、はつきりわかったのであった。こうしてかれは、故国に帰参のかなう日のくるのを、Bの思いで待ちこがれていたのである。

ハーンは、彼が日本に戻ってからどのような主張をし、どのような政治的行動をとったかを、結尾において語らない。そうして、彼が太平洋を横断して初めて見た日本の富士山の姿をそこにもう一度持ち出す。こんどは、日本の明治の武士の家に生まれた青年が西洋諸国を歴訪した長い旅の末に故国に帰り着いたときに初めて眼にする故国の景物として「ある保守主義者」における、ハーンの富士山の描写は、「日本への冬の旅」のものとはほぼ同一である。富士山に変わりはないが、それを見る人の心のあり方、民族や経歴が違っているのである。ここでは富士山は一切の近代的なものを排除した、なつかしくも尊い日本の伝統的な心性のすべてである。ハーンは、ほぼ同じ富士山の描写のあとに、次のようなフレーズを付け加えた。

すると、たちまちいっさいが朦朧^{もうろう}としてきた。目には、空に秀ずる富岳も見えず、その下の方に、青から緑にうす霞^{かす}んでゆく山々も、湾内に群がる船舶のかげも、そのほか、近代日本を形づくるいっさいの物という物が、なにもかにも見えなくなってしまった。ただ、古い日本だけが、かれの眼底にありありと見えていた。におやかな春のかおりをのせて、陸から吹いてくるそよ風が面を吹きなで、^⑤血潮^⑤にふれると、長く閉^とざれていた古い思い出のへやから、ふっと、かれが昔忘れ捨てようとしたいろいろの物のすがたが、ひよいひよいと飛び出してきた。

そうして、富士山を見るときに船員が、視線を高くするように、と言った言葉を、日本の古い精神に対して、古い伝統に対して言うように、口に出して言うのである。「ああ、あなたがたは、目のつけどころが低い。もっと上を見よ。もっと高いところを」

それは物理的に他の山々をはるかに抜いて高い富士山に対して船員は言ったのであるが、ハーンがここで比喩的に言いたいのは、日本の古い伝統的な、^③宗教的精神の中には、西洋人がその自らの文明を誇る高慢さによって、また近代化に夢中な日本人自身も、「視線が低い」ために見逃してしまっている、崇高で尊敬すべき高度なものがある、ということなのだ。

西洋にはアルプスという白く高く美しい嶺^④があるが、日本にはそれと同じぐらい高く、美しい富士山がある。西洋の科学文明は、その冷気によってあらゆるものを死滅させる死んだ高い嶺のようなものである。ここでは、日本の伝統的な心性の優しさ、優美さが、アルプスの山々と同じく、白雪に覆われた高山であっても、朝日があたれば花のつぼみのように薄桃色に色づく富士山によって象徴されているのである。

(上垣外憲一『富士山』による)

問1 空欄 A に入るべき語を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 温情 イ 絶対 ウ 客観 エ 利己

問2

空欄

B

に入るべき語句を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 一意専心

イ 一日千秋

ウ 一喜一憂

エ 一気呵成

問3

傍線部1「富士山に寄せる明治日本人の心性」を説明している三十五字以内の箇所を本文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問4

傍線部2「彼が太平洋を横断して初めて見た日本の富士山の姿」とあるが、この「富士山の姿」の説明として正しくないものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 美しい紫がかった山々の頂上に雪が散っていき、次第に壮麗な白い峰々に変化していく姿。
イ しみ一つない頂が花の蕾の尖端つぼみ せんたんのように染まり、やがて一面金色の混じった白色となる姿。
ウ 積雪で白くなった山肌に射す陽光の当たり具合によって、その色調が変化していく壮麗な姿。

エ 刻々と角度を変える朝の太陽光線によって、富士の雪が微妙な色調の移り変わりを見せる姿。

問5

傍線部3「日本の古い伝統的な、宗教的精神」とあるが、それを言い表している四十五字以内の箇所を本文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問6

傍線部4「西洋の科学文明は、その冷氣によってあらゆるものを死滅させる死んだ高い嶺のようなものである」とはどういうことか。本文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

問7

傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

(二) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

そんなミヤビは奇妙な行動をとるようになった。遊ぶ際に、それまではミヤビはまずワタルの家に、それからワタルとともにわたしの家に誘いに来るのが常だったのだが、ある日いつまで待っても誰もわたしを誘いに来なかった。ワタルの家に行くときミヤビが来たので出かけたとのこと。民宿を訪ねてみても二人はいない。ボルダリングをやる岩壁にもいない。しかたなく家に戻って一人で過ごしたのだが、翌日になると何事もなかったようにワタルを連れてにこにこ笑いながらうちやって来た。「昨日はどうしたの？」と尋ねると悪びれず「ワタルと釣りに行ってた」と答える。あまりにも自然な態度に、釈然としない気持ちになる自分がおかしいのかという思いに陥り、何も言えなくなった。

その次の日、ミヤビは今度はワタルを伴わずわたしの家に来て「トウノさんに映画に連れて行ってもらおう」と言う。「ワタルは？」と訊くと、「誘っていいのは一人だけなの。ほら、お昼ご飯も町で食べるからさ、お金かかるでしょ？ トウノさん、そんなに給料もらってるわけじゃないし」ともつともらしく答える。もやもやする気分は拭い去れなかったけれど、映画と昼ご飯の魅力に釣られてしまったのと、一昨日はワタルもわたしを放っておいたんだし、と思い返して、わたしはミヤビの誘いに乗った。翌日、ミヤビに連れられてわたしを誘いに来たワタルは、恨みがましい顔がしたいのにできないというふうなすっきりしない表情だった。わたしも数日前はそんな顔をしていたに違いなかった。

そうやってミヤビは三人で遊ぶ日の間にワタルだけと遊ぶ日とわたしだけと遊ぶ日を織り交ぜるようになった。一人放っておかれる日は寂しさと、ミヤビとワタルがどんなユカイな時間を過ごしているのだろうという羨望に悩まされ、ミヤビと二人だけで過ごす日は文句なく楽しいのだけれど、ふとした折にワタルが感じているはずの寂しさや羨ましさに対する罪悪感がよぎり、ミヤビと別れて家に帰ってからはそれがいつそう膨れ上がった。こんなことはよくないと思ってミヤビと二人の日に「三人で遊ぼうよ」と言ってみたのだけれど、ミヤビは無邪気そうに眼を見開いて「どうして？ しよっちゅう三人でも遊んでるじゃない。二人で遊ぶ日があってもいいでしょ？ 映画連れてつってもらった時もアオイとわたしだけだったじゃない」と最初の時に映画と昼ご飯に釣られた弱みを突いてくるため、今さらいつも三人で遊ぶべきだとは主張しづらかった。

ワタルもわたしと同じ気持ちだろうから相談を持ちかければよさそうなものだが、誘ってもらえない日がつらい、こんなことが続くことが持たないなどと告げるのがムシヨウに恥ずかしかった。そもそもワタルとわたしは幼なじみではあったけれど、異性であるせいもあって、学校の同性の友達のようにびったり息が合った仲ではなかった。ただ、集落に年の近い子供が他にいないため、ワタルとわたしには仲良くしなければという意識があった。久しく喧嘩をしたこともなかったが、腹を割って話し合う習慣もまたなかった。好きか嫌いかで言えば好きだったけれど、お互いに遠慮し合っていたところは多分にあった。

ミヤビとワタルの姿が見えない日、私は気を紛らわせるために一人で岩壁に取りついてみた。怪我をせずに飛び降りられる程度の高さしか登らなかったけれど、横に移動したりジグザグに動いたりして変化をつけた。手足をかけるポイントを探すこと、適切に重心を移し体を動かすことに集中

していると気持ちが澄んで心の苦痛²を忘れた。しかし、地面に下りて緊張を解くとどうしてもまたそばにいい二人が思い出された。わたしはとぼとぼと家に引き返した。畑のそばを通った時、例のからかい好きの大人たちが「何で一人なんだ？　はぐれたのか？」「迷子か？」と話しかけて来たのがうつとおしかった。

家の敷地内にある父の工房に入って行くと、いつものように木材の匂いが立ち込めていた。父は観光地の土産物店や町の雑貨屋に納める木工品を作るのが仕事だった。母も手先が器用で家事の合間に木に模様を彫ったり動物などの小さな彫像を作ったりして売りに出していた。たまたま二人ともいて、それぞれの作業台から眼を上げてわたしを見た。「何か手伝おうか？」と言うと母が「それより工作の宿題やれば？」と夏休みの義務を思い出させた。

今年の工作は木の風鈴を作ろうと決めていた。ほんとうは曲線の美しい鐘の形をした物がよかったのだけれど、手彫りで鐘の形を彫り出すのは時間がかり過ぎるので、作るのは板を底のない四角柱の形に貼り合わせた風鈴だった。工房の床に落ちていた適当な木切れをもらい、正確に測って余分な面積を鋸で切り落とす。貼り合わせる前に丁寧にサンド・ペーパーをかける。前からヤスリやサンド・ペーパーをかける工程が好きでよくやらせてもらっていた。ささくれ立った木の面がしだいになめらかになって行くのを指の感触で確かめるのも楽しいし、これ以上はないと思えるほどつるつるに磨き上げると手塩にかけて育て上げたという気分になった。細かい粉塵^{ふんじん}を布で払ってつやつやと光沢のある木肌が顕われると胸に快感が満ちた。

サンド・ペーパーを使っていると、唐突に母が言った。

「A」

母はミヤビがワタルとわたしにしていることを把握していたのだ。わたしが「そうかもね」と曖昧^{うまい}に頷くと、父も言った。

「特に映画やテレビの連中なんてろくなものじゃねえからな。」

もともと父は集落を訪れる映像業界の人々をよく思っていないかった。私が井戸から救い出された後「底に空き缶とかいろんなゴミが積もった」と伝えた時も、「そんな物投げ込むのはロケの奴等だな。井戸には水の神が棲^すんでるんだから、使わなくなつてからもきれいにしておかなきゃいけないのに」と苦々しげに吐き捨てたものだった。

わたしはもうミヤビのことは気にしないことにして、午前中の早い時間から工房に入り風鈴作りに没頭した。母はわたしの意を察してミヤビが誘いに来ると「あら、アオイその辺にいなかった？」ととぼけ、わたしは工房の窓からミヤビが困惑したようにふらふらと我が家の玄関を離れるのをタンパクな気持ちで眺めた。四角柱からぶら下げた木片がカタカタと乾いた音をたてる素朴な風鈴が完成してからも、もっと凝ったものが作りたくなってわたしは二個目の製作に取りかかった。今度は四角柱の側面に花や鳥の彫り模様を入れるつもりだった。

ワタルは幼なじみだけあって、すぐにわたしの居場所を見つけた。工房の戸口からそつと覗^{のぞ}いて「アオイちゃん、何してるの？」と声をかけ、わたしがわだかまりのない態度で応えると安心したように入つて来て「ばくもここで工作の宿題していい？」と尋ねた。それからワタルとわたしは並んで工作を始めた。ワタルも風鈴を作ろうとしていて「風鈴の傘の部分いらなくない？　カタカタぶつかり合うパーツさえあればいいんじゃない？」と言うので、労力^④をハブきたいのかと思ったらそうではなく、猫の顔のレリーフの下に何匹かの小さな鼠^{ねずみ}がぶら下がってわさわさ揺れる、手の込

んだ物を計画していたのだった。

ワタルも細工が性に合うようで、すぐに作業に夢中になった。次の日も、その次の日も、わたしたちはひたすら木切れを彫ったり磨いたりして過ごした。ワタルもわたしもミヤビの名前は口に出さなかった。ミヤビの方もわたしたちのことはあつさり忘れただろうと思っていたが、何日目かにつつと気配を感じて顔を上げるとミヤビの姿が思いがけず近くにあった。作業台に面した窓越しにわたしたちを見ていたのだけれど、浮かべた微笑みこそわたしたちとの心の距離を測るようにいくぶん控えめだったものの、窓の枠に肘をついた寛いだポーズにはやっぱりこちらの緊張や警戒を解く親しみやすさがあつた。

「面白そう。」ミヤビは話しかけて来た。「わたしにもできるかな？」

やすやすと迎え入れたのは人の歛心³を買うのが巧みなミヤビの **B** 管に落ちたということかも知れない。ミヤビに依然魅力を感じていたのも事実だった。しかし、わたしは二度とミヤビに振り回されまいと決めていたし、ワタルも同様だっただろう。

用心の必要はなかった。ミヤビもまた毎日工房に通ってくるほど木工に熱中したのだ。ワタルやわたしと同じように風鈴を作ることに決め、細長い板を彫り始めた。初めは抽象的な筋と凹凸の模様を彫っているように見えたが、上の方が彫り上げられた時、何を彫っていたのがわかった。「崖だ」「崖だ」とワタルとわたしが口々に言っていると、ミヤビは社交上のものとは一味違う自然な微笑みを浮かべ、自作を見返しながら「うん、崖なの。崖に見えてよかった」と満足そうという以上の感動の面持ちで呟いた^{つぶや}。

ヤスリを使って丁寧な崖の凹凸を磨くミヤビの眼は静謐^{せいひつ}で、細長い板に尖った所やざらついた所が一箇所もなくなる頃には、ミヤビの顔つきからは毒気も洒落^{しゃれ}つ気も抜け随分素朴な表情を見せるようになった。その崖にクライマーを模したヒト形の木片六個がぶつかって音をたてるのがミヤビの風鈴だった。てっぺんの横木からぶら下がる木片を指して「この三つはアオイとワタルとわたしだよ」と言い、「あとの三つは？」と尋ねると少し考えて「わからない。子供かな。いつか生まれて来るアオイとワタルとわたしの子供」と答えてちよつと照れた。

風鈴が完成した翌日、ミヤビはちよつと出番が終わった父親と一緒に東京へ帰った。トウノさんに車で電車の駅まで送ってもらうミヤビ親子を、ワタルとわたしは民宿の前で見送った。ミヤビはボルダリングに使うスベリ止めのチョーク入りの袋をわたしたち二人に手渡し、「楽しかった。ありがとう」と言つてワタルとわたしをそれぞれ軽く抱擁したのだが、そんな都会風の挨拶は初めてのワタルとわたしはきよとんと棒立ちのままで、ミヤビが車に乗り込んでドアを開けてからようやくはつとして手を振った。車が走り出すといちだんと大きく手を振り回したけれど、ミヤビには見えただろうか。

それっきり今日までミヤビとは会っていないし何のやり取りもないのだけれど、たまに俳優である父親の名前を眼にするとあの夏の日々を思い出す。ミヤビのワタルとわたしを交互に誘い一人を放置するという謎の行動についても思いをめぐらし、年下の子供たちとの退屈なつき合いを面白くするための奇策だったのだろう、と解釈している。今でもミヤビに翻弄された時のつらさははっきり甦^{よみがえ}るが、それでもミヤビは憎めない、わたしが生まれて初めて魅せられた人間だった。

(松浦理英子「風鈴」による)

問1 「ミヤビ」が「わたし」と「ワタル」の住む集落に滞在していたのはなぜか。本文中の語句を用いて二十字以内で説明しなさい。

問2 傍線部1「奇妙な行動」とはどのような行動か。「〜という行動」に続くように、二十十字の箇所を本文中から抜き出して答えなさい。

問3 傍線部2「心の苦痛」とはどのような感情から生じたものか。それを最も端的に言い表している十字以内の箇所を傍線部2よりも前の本文中から抜き出して答えなさい。

問4 空欄 A に入るべき一文を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 彼女もかなりのごうつくばりだけど、悪気はないのだと思うよ。

イ 都会の人は人あしらいがうまいけど、腹は冷淡な人が多いからね。

ウ 都会から来た人にしては、あの子はわりと気が置けない方だね。

エ 彼女と馬が合うなら、話せばきつとわかってもらえるはずだよ。

問5 傍線部3「歓心を買う」の意味として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 有利にはかろうとする イ 隙に乗じる ウ 感動をかきたてる

エ 気に入るようにする

問6 空欄 B に入るべき体の部位を表す漢字一字を答えなさい。

問7 本文の説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 都会から来た少女の言動に振り回される様子を描くことで、集落に住む子供たちが根源的に抱えこまざるを得ない絶望を浮き彫りにしている。

イ 都会に住む子供は心根が貧しく山間部の子供は豊かであるという価値観に基づいた人物描写を徹底し、物語の主題の中心としている。

ウ 外部からやってきた異質な存在によって集落に住む子供たちの関係が乱れるさまを、巧みな心情描写や行動描写で表現している。

エ 人を操ることに長けた都会の少女が素直さを取り戻してゆく過程を、山間部の美しい自然を活写しながら丁寧に描き出している。

問8 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

〔以下 余白〕

国語解答用紙

〈2025 R 07190062〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

<2025 R 07190062>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

[illegible]

(二)

問1 採点欄	
--------	--

問7 採点欄	
--------	--

(一)

問4・5 採点欄	
----------	--

問1・2・3 採点欄	
------------	--